



GERMAN TUNER REPORT

MANSORY

ビスポークという世界観 自由自在に表現する孤高のカスタマイザー

ドイツ東部、あと数10kmも走ればチェコ国境という地、ブランド。僻地といっても過言ではない片田舎に、マンソリーは拠点を構えている。世界の富裕層を虜にする独自の世界。マンソリーだけが作り出せるスペシャルコンプリートを現地から紹介しよう

REPORT 撮影 高橋 健太 KUMASAKI (af imp.)
PHOTOGRAPHY 小林 健 Takeshi KOBAYASHI
INTERPRETATION&COORDINATION 辻 実 Hiroshi TSUJI (TSUJI Hiroshi OFFICE)
取材協力 ヲウガー コーポレーション
TEL.048-853-2222
<http://www.mansory.co.jp/>

CEO
Kourosh MANSORY

情熱的にブランドを牽引するクーロッシュ氏。ミュンヘンからこの地へ移動した理由は「集中して創作活動ができるから」。50歳とは思えないバイリチアの持ち主だ





MANSORY CYRUS

フルカーボンボディをまとうサイラス、DB9、DBSをベースにそれぞれ15台ずつ製作されるコンプリート。日本円で5000万円以上のプライスタグが付くが、納得の出来である



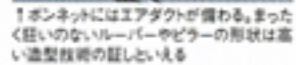
1 独特の10スポークホイールはもちろん鍛造。F9×20、R10.5×21という前後異径サイズでの異径となる



1 FIAT GTS マシンのような大型リアボトム構造に注目したい。パンパーレベルまでディフューザーを作り込んでいる



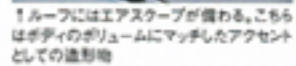
1 リアアンダーは大型のパーティクルフィンが備わるディフューザー形状。スクエアデザインのセンターマフラーも印象的



1 ボンネットにはエアダクトが備わる。まったく狂いのないルーバーやピラーの形状は高い造形技術の証といえる



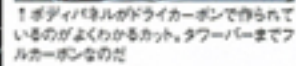
1 リアスポイラーは電動で可動する。リフトはわずかに30mmほどだが、高速域での空力性能は大きく変わるだろう



1 ルーフにはエアスクープが備わる。こちらはボディのポリュームにマッチしたアクセントとしての造形物



1 センターコンソールには限定15台をあらわすシリアルプレート。隠されたオーナーだけが手に入れることができるのだ



1 ボディパネルがドライカーボンで作られているのがよくわかるカット。タフーパーまでフルカーボンなのだ



1 カーボンセーラーのコンビとなったステアリング。パネル類ももちろんカーボンセーラーでフルリムされる。一分の隙も見られない仕上げだ



1 キーをオンするとセンターコンソール上にはCYRUSの文字が浮かび上がり、最高の空気を運ぶ。オーナーのみが味わえる世界だ



マットカーボンボディのCYRUSは日本へ!



一足聞前というCYRUSは日本の顧客向けの専用。撮影車とは異なりマットなカーボンボディが異彩を放つ。インテリアはグレアアルカンターラ仕上げ。まったく常務車の違う2台のCYRUSを並べることができた

GERMAN TUNER REPORT MANSORY

辺境の地から世界へ
セレブリティの心を鷲掴みにする
唯我独尊のマンソリーワールド

2004年のブランド立ち上げからわずか6年。エキゾチックカーをベースに、さらなるモディファイを加える最上級のコンプリートカーブランドとして、マンソリーはその名をプレミアムシーンに轟かせている。ベントレー・コンチネンタルGTを皮切りに始まったマンソリーの快進撃は留まることを知らず、アストンマーティンやマクラーレンSLR、そしてついにはあのブガッティ・ヴェイロンにまで及んでいる。ハイエンドカーを模しそぎ手掛けしている。そんな印象を吹き飛ばす、東部ドイツの街プラントへと赴いた。5年前にミュンヘンからこの地へと移ったマンソリー。新設したファクトリーで出現させてくれたのは、ブランドを率いるクローツェン・マンソリー氏。そしてデモカーとして待ち受けていたのは、アストンマーティンDB9をベースとしたコンプリートモデル「CYRUS」と、カーボンボディをまとったGクラス、Gクチュールの2台であった。

カーボンですら既製品品にあららずどこまでもオリジナルを追求 2004年のブランド立ち上げからわずか6年。エキゾチックカーをベースに、さらなるモディファイを加える最上級のコンプリートカーブランドとして、マンソリーはその名をプレミアムシーンに轟かせている。ベントレー・コンチネンタルGTを皮切りに始まったマンソリーの快進撃は留まることを知らず、アストンマーティンやマクラーレンSLR、そしてついにはあのブガッティ・ヴェイロンにまで及んでいる。ハイエンドカーを模しそぎ手掛けしている。そんな印象を吹き飛ばす、東部ドイツの街プラントへと赴いた。5年前にミュンヘンからこの地へと移ったマンソリー。新設したファクトリーで出現させてくれたのは、ブランドを率いるクローツェン・マンソリー氏。そしてデモカーとして待ち受けていたのは、アストンマーティンDB9をベースとしたコンプリートモデル「CYRUS」と、カーボンボディをまとったGクラス、Gクチュールの2台であった。

CYRUSとネーミングされたアストンマーティンDB9ベースのコンプリートは、その存在が希有なものであることを誇示してくる。全身ドライカーボン。ボディパネルやインナーパネルは、一部を除いてプリプレグのカーボンに置き換えられている。この事実、他のチューナーでは到達することのない領域へと、マンソリーは行き着いている。

このCYRUS、DB9ベース、DBSベースでそれぞれわずか15台ずつという限定モデル。マンソリーのクリエイティブティとテクノロジーが結実した傑作といえる。

カーボンで再造型されたコクピットのようなインテリア



カーボンがモノトーンとなったクチュール。シートバックは2色の織物とカーボン、オーディオシステムなどのインストールもカーボンが主。



1.5リットルはアルカイト、2リットルはカーボン製のコンロ、異なるカラーの織物の合わせが特徴の織物は見える。

カーボンがモノトーンとなったクチュール。シートバックは2色の織物とカーボン、オーディオシステムなどのインストールもカーボンが主。



1.5リットルはアルカイト、2リットルはカーボン製のコンロ、異なるカラーの織物の合わせが特徴の織物は見える。

色、素材、手法
そのどれもがオリジナル

上の写真は、内装の異なる2つのモデルが並ぶ様子。天然皮革から、竹や大麻繊維、アート系素材のカーボンまで、自由なカラーリングが可能。下はインテリアのサンプル。カーボンの独特な質感を再現し、またこの色に1色以上を組み合わせることもできる。



今でこそいくつかのチューナーが、ベントレーやアストンマーティンを素材にしているが、マンソリーの作

常に見る者を惹きつけて止まない驚きと愛得力がそこにはある。マンソリーの特質性は、全身一部分もなく完璧にコーディネートされていることに由来する。ノーマルの部分を採り出すのは難しいだろう。果たして単にチューナーと呼んでしまっているのか？ そんなことすら思わせる。アル手ザン？ それともアーティスト？

卓越したクリエイティブティを、自在に発揮して作られる作品は、比類無き存在感を放つ

最近到着するまでという作風がある。これは、間違いないだろう。「様々なニーズに対応する用意と能力がある」ということを見せなければいけません。だからこそ新しい素材や珍しい手法を提示するのです。カーボンにしても、マンソリーは3段階の織り目を用意している。内装の素材にいたっては、あらゆる素材や色が揃っている。

「顧客に『こんなことができるか？』と聞かれたら、できないとは言いません。希望を超えるカタチで実現するために挑戦していくのです。主に自由自在、できないことはないのでは？という感覚です。例えば、『いいクルマを見たら、クルマ好きなら誰でも心が躍るでしょう。これは全世界共通。私はそんなクルマをこれからも手掛けていこう』という3月のジュネーブでプレミアとなるSLSを皮切りに、今年もまたリプライズの1年となるはず。」



1年目標額につきあってくれたアンディさん。このクルマはクリエイティブな発想で作りだして欲しい。

MANSORY G-COUTURE

G65AMGをベースに徹底的にカーボン化が図られたGクチュール。スクエアなボディが全面的にカーボンに置き換えられたその姿は、まさに異形。存在感強烈に主張するコンプライド。



1.5リットルのエンジンがパンパニアでカーボン化された。スクエアなボディが全面的にカーボンに置き換えられたその姿は、まさに異形。

1.5リットルのエンジンがパンパニアでカーボン化された。スクエアなボディが全面的にカーボンに置き換えられたその姿は、まさに異形。

1.5リットルのエンジンがパンパニアでカーボン化された。スクエアなボディが全面的にカーボンに置き換えられたその姿は、まさに異形。

1.5リットルのエンジンがパンパニアでカーボン化された。スクエアなボディが全面的にカーボンに置き換えられたその姿は、まさに異形。

1.5リットルのエンジンがパンパニアでカーボン化された。スクエアなボディが全面的にカーボンに置き換えられたその姿は、まさに異形。

1.5リットルのエンジンがパンパニアでカーボン化された。スクエアなボディが全面的にカーボンに置き換えられたその姿は、まさに異形。

1.5リットルのエンジンがパンパニアでカーボン化された。スクエアなボディが全面的にカーボンに置き換えられたその姿は、まさに異形。

1.5リットルのエンジンがパンパニアでカーボン化された。スクエアなボディが全面的にカーボンに置き換えられたその姿は、まさに異形。



MANSORY